経営学部・経営学研究科OB・OG×先生スペシャルトーク「高度職業専門人のキャリア形成」

ー経営学部・経営学研究科を修了したOB

経営学研究科は東北地方において非常に多くの修了生を輩出しており、修了生の多くは、税務・会計の専門家である「税理士」として各地で活躍されています。本研究科は、租税法をはじめとした税理士試験の免除体制にとどまらず、会計専門科目や経営学系の専門科目などプロフェッショナルに要求される知識について充実したカリキュラムを敷いています。スペシャルトークでは、経営学部から大学院に進学した木元絢太（きもと・けんた）さんに在学時の経験やキャリア形成などについてお話を伺いました。

話し手：木元絢太さん(2026年経営学研究科修了)
東北学院大学経営学部を卒業後、経営学研究科へ内部進学。2026年4月よりPwC税理士法人にて勤務。

税理士志望・大学院進学のきっかけ

堀：木元さんは本学経営学部から大学院に進学されています。税理士を目指そうと思ったきっかけや、大学院進学を考えた理由などを教えてくれますか？

木元さん：商業高校出身だったのもあり、元々簿記や会計に関心がありました。大学進学後、これからのキャリアを考えた際に、簿記・会計を活かした職業に就きたいと思い、税理士を志すようになりました。学部生の頃は堀先生のゼミに所属し、租税法の学習をすすめました。ゼミで過ごすなかで、大学院でさらに専門的知識を学びつつ、税理士試験の科目免除（*税法の修士論文を執筆し、所定の要件を満たせば税理士試験の税法科目が2科目免除となる）を受ける機会があることを知り、大学院進学を意識するようになりました。

税理士試験への挑戦

堀：木元さんは学部の頃に税理士試験の会計2科目、大学院進学後に税法1科目を合格しましたね。資格取得を目指す学生にとっては理想的なロールモデルのひとつだと思います。国家試験と学生生活と両立は大変ではありませんでしたか？

木元さん：確かに試験勉強は大変でしたが、専門学校で学習のペースをしっかりと作り継続的な学習を心がけました。

一方で、アルバイトもしていましたし、大学の講義も欠かさず出るようにしていましたので、学生生活はハードでしたが、両立した方かなと思っています。

税理士試験は難易度の高い試験と言われていますが、しっかりと学習を継続すれば決して合格が困難なものだとは思いません。

堀：仰るように、自分でペースをつくって、日々継続し努力することは非常に大事なことだと思います。それができる学生さんは自然と結果にたどり着けていますね。若い人にとってはなかなかそれが難しいところではあるのですが。

聞き手：堀治彦（本学教授）
都内のシンクタンクにて税制・税法の調査研究等に従事したのち、2022年より本学に着任。
専門は租税法・税務会計

これからのキャリアについて

堀：大学院修了後は東京の大手税理士法人に勤務されるそうですね。これから社会人としてどのようなキャリアを歩んでいきたいですか？

木元さん：学部ゼミの同窓生に優秀なキャリアを歩むメンバーが多かったので、私も東京でプロフェッショナルとしての挑戦をしてみたいという気持ちがありました。競争的な環境では高いバリューが要求されると思います。そのため、税理士試験の科目免除にとどまらず、4科目目、5科目目にチャレンジしたり、英語スキルの向上を図ったり、税法に関する専門的なことや語学など、

ナレッジの向上に努めていこうと考えています。実際に、3科目目を合格した後から取組んでいます。

堀：それは素晴らしい取組みですね。

大学院進学を考えている人へのメッセージ

堀：大学院へ進学されている方へのメッセージなどはありますか？実際の経験であったり、環境なども教えて頂ければ。

木元さん：数点あります。まず、大学院で税法免除を目指すということについてです。私の世代は実感がなかったのですが、かつては大学院での税法免除にネガティブな見解もあったと記憶しています。一方で、昨今の租税法規は複雑化し、様々な角度から理解を試みていかなくてはならないと思っており、国家試験の勉強とは異なる視点から税法の学習をできたことは貴重な経験となったと思います。堀先生からも「租税法を立体的に理解しよう」と言われていましたし、実際に国家試験の勉強のなかで理論や計算を覚えていくのとは違う角度から学びがあったのは貴重な財産となりました。もう

ひとつは、大学院という環境の多様性です。開講されているカリキュラムはもちろん素晴らしいですが、学部から進学した学生と実際に社会人として働いている社会人学生が一緒に机を並べ、切磋琢磨する環境は非常に刺激的でした。普段でしたら上司と部下の関係性なのですが、人生の先輩方にアドバイスを頂いたり、同じ目標に向かって取組む機会があったのは貴重な経験であったと感じております。

堀：素晴らしいメッセージです。このページをご覧になっている方々に届けばいいですね。本日はありがとうございました。

*本インタビューは2026年4月時点のものです。